画面か人か、それが問題

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

スクールカウンセラー（以下SC）の重要な仕事の1つに講演活動がある。発達心理からみた生徒児童の理解を促進し、先生と子どもたちが織りなす教育という尊い営みが、円滑に展開されるよう側面から支援しかつ啓蒙するのが主な目的だ。

主な講演対象は、①生徒、②教師、③保護者及びPTAや青少年育成会、成人学級等の関連団体の3つになる。今までのSC活動の中でそのテーマを振り返ってみると、その時々によって依頼されるテーマの変遷があり、バラエティに富んでいることに驚く。

まず生徒対象でみると、「いじめを生まない心・いじめに負けない心」、「友達づくりプログラム」、「より良く生きるために」、「障害者の対応の仕方について」、「好きな仕事を見つけるために」、「今進路と将来に向けて」、「ストレス対処法」等が主なテーマである。

対教師では、「カウンセリングマインドを生かした生徒の見方・接し方」、「学校カウンセリング研修」、「人間関係プログラム〈教師編〉」、「いじめの背景とその対応」、「子供を正しく理解するために・ADHD児童の指導を中心に」、「学習障害LDの理解とその対応」、「特別支援教育のあり方について」、「生きる力をつけるための心の健康について」、「変わってきた生徒・保護者の理解とその対応」、「中学教師とストレス」等。

そして、保護者や関係団体でみると、「いじめを乗り越える子供の育成について」、「反抗期の子供の接し方」、「望まれる親子関係のありかた」、「アサーティブ・トレーニング入門」、「子供の心の健康について」、「わが子をニートにさせないために」等となっている。

“いじめ自殺”の事件が報道されると、いじめに関するテーマが増える。また、殺人事件の容疑者の少年が、アスペルガー症候群か？等と疑われると、広汎性発達障害やADHD（注意欠陥・多動性障害）やLDといった発達障害に関する講演依頼が多くなる等、テーマは事件や世相を反映した傾向を示す。

そして、ここにきてにわかには増えてきているのが、「子どもたちをニートにさせないために」といった、働くことに関するテーマである。これは私の専門が臨床心理や発達

心理とともにキャリア心理であることが周知されてきたという事情もあるが、学校生活から職業生活への移行が今ほど難しい時代はないという意識が、学校現場や家庭にも広がってきたからだろう。さらに、昨今の雇用状況の悪化や労働者がモノ扱いされる労働現場の歪みの深化等、働くことが重大な社会問題化している時代背景の影響も大きいと考えられる。

62万人を数えるニート。彼らはなぜニートに留まっているのか？ ハローワーク渋谷の出先機関“ヤングワークプラザしぶや”で、ニートやフリーターのためのグループカウンセリングを行っているが、彼らの社会参加意欲は高い。UFJ総合研究所（当時）の調査でも、“働いていないことをどう感じるか”の問いに75%の者が「焦っている」と答え、“なぜ就職活動をしないのか”には「人づきあい等会社生活をうまくやっていく自信がないから」が一番多く、「自分の能力や適性に合った職業がわからない」等の職業適性の問題が2、3番目にくる。彼らは働きたくないのではなく、働けないのだ。いや、働く準備ができていないというのが適切だろう。そのため、当グループでは、対人不安や不信を解消し、人や集団への信頼感や安心感を培いつつ、人間関係スキルの獲得を、第1の目的においている。

しかし、幼少期からテレビやゲームばかりと向き合い人的交流が乏しかったり、いじめ等による傷つき体験をひきずっていたりすると、事はやっかいである。人や集団と良い関係を味わう原体験が、ギャング世代の小学校や母子分離に伴う同性同年代の親密な交際が課題の中学校（思春期）で持てなかった若者は、青年期の職業移行で非常に苦労する。

成績良好な子は育っていなくても、大学時代までは何とかやれる。だが、逃げられない対人関係の職場に入ると一挙に問題は表面化し、不適応に陥ったり破綻さえ生じてくる。

“人間”と書くように、人は人との間での様々な体験があって初めて健全に育つ。小中時代の社会化促進の時代こそ、画面より人と向き合って過ごしてほしいと切に願っている。